



駿
臺
雜
話

仁
集

曾
775
176



[Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page]

此
法
甚
奇

敬
告
世
人

前
明
州
府
王
公
題

116

門本曾4
175
176

鳩巢室直清先生著

駿臺雜話

肥後 熊本 中村直清

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷。廼鳩巢室先生之所著也。夫以講論之餘。及此言大抵發乎所問者。而研窮理義。藻鑑人物。或往事之可感。或當世之可警。莫非守正學而扶名教之意也。何其諄諄。諷人之若是我。一時遊門之士。皆虛往而實歸。定可知已。明遠雖不敏。執經下座。竊與有聞焉。嗟乎。在則人亡。則書先生已遠。九原不作。後之讀此書者。亦可以想見其造詣之深爾。雖然。鐘之應撞。而始鳴。其聲之大小。洪纖。惟隨乎其所叩。則善教之待其問。理亦不異於是。而先生之蘊。



固有非斯書所能盡者矣。書肆崇文堂請上諸木以傳不朽。因與其孫室直溫謀焉。遂告之。官以一本授之。適剞劂功成矣。於是序。寬延庚午十一月冬至日。

東都 直學士藤原明遠謹識

ひさし書院大塚北東駿臺のともと幸は竜むす
てはこれ宿の翁有り。其のともと國より家へ來
て家者せし。ともとを深山本はたあはれ
屋を材はけし。其指をたれ人をあへて
學の窓へ文張む。はけは是れ其の人となし。を
はこれともとをれは。きのみをひり。あはれ
ともとを。ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。
無病日又加。ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。
つ。ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。
ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。ともとを。あはれ。

續籍

享保五年の事〜九月中旬鳩梁の翁駁老の事
乃毫少〜々筆公と云

駁臺雜話目錄

仁集

老學の自叙

異説まじりく

愚心公う山

葉公う龍

矯誣警言

鬼神此徳

妖を今や真家

年月の立春

釋源空の折言

心の月志ひ

老僧う持木

扁鵲茶匙とまの

忠孝の心

聖人乃誠

飛驒山の天狗

神ひちくくの歌

諸道より入り入

釈寂室の秘訣

義集

武運の稽古

善悪の報

天人相勝

爰乃淳世

鈴木某の歌

朝のた一時

不岐不求

春秋のあはれ

秘事ハ曉

佛なるやう

仁ハ心のい乃ち

義を心のきこ

浩然の氣

敬の工夫

民を王者の天

富士のすそ

天下の寶

風俗ハ政の田地

禮集

天下ハ天下の天下

直諫ハ一番鎗を離

秋田壹波

伴大膳

阿閉掃部

士の風義

歳寒知松栢

多折ハ千とぬく春風

烈女種

澤橋ハ母

天野三郎兵衛

結露の何

二人の乞兒

智集

燈臺もやとる所
法ハ江河のわう
ほまじく草
渡部番
恭時の無欲
足利家の乱
兵法の大事
兵を詭道
大敵ありまじ

信集

運慶の口傳
鶴鶴のゆき
音砥う續松
大佛の銭
楠正成
武田信繁
孫臏韓信の兵法
不忘向君

月を世くの形見
遍照う尾うり
詩文の評品
六義の沙汰
多錢吾賈
曇陽大師
言ハ身の文
尤物人として後

離騷の秘事
世とすく力とすく
傳歌と感興の益あり
作文ハ讀書あり
文章の盛衰
寸鉄人として後
一日の澤
年とんはり

駁基回答の話は限りあるを經傳の文と論を以て所論
の書より諸生の問に答は所問の人より答ふ所のなる所

論の父冬多きくして齋くして所司の事多しきくして
ありんかゝるに所記を正道と明し邪説を辨すは
て字同の大淵く條く又を世俗の謗遠近の條くして平生
の事を通して観者の益もなるべき事をもと採集く
きり多しあるあるよやくく記く多きをあるある
多めよ章に似てたり其中の托寄の一語と摘て篇よ名付
けし鋪叙倫りく議論複出するやうなきもあつてもあれ
かゝる撰次く書くたすよんぢあるよん多くそのうは
とるに叙派く家く賄くをよのな
國語大やう古雅よるよん世俗のやうき語と避るとい

てし事情く平く人聴く切なよん多き部く俗語く
そのくは用て擇ひてはれよんはあはれ又近代漢字と
もちひく音やくはよんよく常語よるやう武家の盛
衰く武運く武士の武功く武進く人々礼辭く家と
挨拶くよん事よ懈弛く油めよん君父の義経と勅
尚とよ山林の鬼神と天狗よん是等比類なは多し甚
き習とよもよく世よんよん訂なよん今改るよん
又字と誤りよんよん號令く流布するよん
よん御字たりよん觸字とよん強忍よん教くす
よん御字とよん御字たりよん押字とよん甲はよん同

訓は誤りなりと云ふに一五露の漏と云はくといふは亦字
ともちひ種ゆか菜さいの田と云はけといふは畠字ともちひ伴た
諾の人と云ふもいふは伽字と用ひも二箇下の二字と合
せし一字といふ露の下垂すれといふ字と云は白田の
二字と合せし一字といふ白地の田といふ字と云は人加の
二字と合せし一字といふ人の相かるといふ字と云は
又同仇の兵といふといふは味方の字と云はゆれといふの
いふ諾と取するも一又家號氏族のちおちらるといふ
いふ梶字と用ひも梶字と誤く梶は代もなる一すて
いふ代を假名といふ其詞と云ふ一いふもなる一

されば畠山梶原といふ氏族といふすは假名ともちひ誤
誤りなりと云ふ真名ともちひてもなる一

雑話の中より用ふる古語古文といふは本意頗多しといふ
りといふは對しててあはれすといふ一または活字といふ
は亦いへばいふいふを首尾せぬ本もいふは後小書
と考へる一五也されといふ先老を考へて精神も全
くいふその出處を考へていふ考へありぬといふ
一もいふ考へていふ一耳音讀名といふ
大考のありといふ一と傳はるるいふ

飯臺雜話卷一目錄

仁集

老學北自叙

異説まろく

愚公う山

葉公う龍

矯詔と警言い瘡を

鬼神の徳

妖ハ人トを具了

年内の立春

釈源空う誓

心乃目志ハ

老伯ト接木

扁鵲葉匙ハす片

忠厚の心

聖人の誠

飛驒山の天狗

神ハちク乃欲

諸道わき入

釈寂室の秘訣

駿臺雜話卷一

老學自叙



ぼろくろの邊來一昔と思ふも武苑の産少く免あやふ
 其の初々として結ひて詩書と事とてより其の武六檄
 と推して藩邸小遊り一あるを及と願て京師に旅舎は其
 後此地に家居するに常々宿學と修め素願と僕て一せと修
 事とあんなるふれ修りて修年とて修りて修りて修りて
 物とて故郷に物と修せしむる先材腐てやうて丘と首ある死を
 待たざるん分てしむるされ公事との歳月と修りて今大馬のよ
 しひ七十ある年の年と修りて修りて修りて修りて修りて
 師表とありて修りて修りて修りて修りて修りて修りて修りて
 く世とありて修りて修りて修りて修りて修りて修りて修りて

大正二年一月廿日寄
 中村菊雄氏贈

潛漢せんかんよりく百家と録核りくかくする事揚外やうがい菴あんより文字論議の
 末すえをわく八柱はちちゆうと議すことことも學術がくじゆつに徳とくをわく八柱はちちゆうとする
 事こととさうんされ明の中葉ちゆうえつより世の學術がくじゆつも西せいに
 右教うけうも類るいとさきりしきりし王陽明わうめい出いく良知らんちゆう孔子こうしと唱なげ朱子しゆしと
 排はいきしるも明の學風がくふう大だいに衰すいしぬ陽明やうめい既すでに没ぼつすも其流そのりゆう王
 龍溪りゆうせいよりきしはわくは福ふく子しとありきまはるし世の學者がくしや良知らんちゆう沈しん
 確かくし窮理きゆうりの欠けつ俾べいし其弊そのへい嘉靖かせい萬曆まんりきの間のまひよりわく天下てんかの
 學者がくしや陽儒陰佛やうにゆういんはつの徒たごにたりてや其諸賢しよけんよく思おもひ及および西
 山しやん以下の諸賢しよけん愈いふに汗あせ下くだるをこそ所好しよかうも阿神あしんよりわく及およびし
 又其德行たうてい材識さいしきよりも月季げつき并ならび今いまは儒者にゆうしやの下のしたよりあるべきに
 けりんをよみて朱朱しゆしゆ萬分まんぶんの二ふたつに及およびぬ學識がくしきとともく其その及および
 なくんれと識議しきぎするを騁しゆうの鵬ぼうと笑わらひ暴はつ露ろよて海うみと剛こうなるを

似にて韓愈かんいゆいんのり并ならぶ事ことも天てんと知しく天てんとふなりし事ことの
 類るいありしゆふ抑おさへりて識しれ後のち其説そのせつの新しん奇きなること存ぞんひて
 雷同らうとう瓦鳴わなうする事ことあけくあることことも國くにを百年ひゃくねん來きたる事ことを
 文紀ぶんきより用もちく師儒しにゆう世よの輩たいがけり其その學がくの乞これはさるるに
 多おほく福ふく子しと學がくく宗信しゆうしんしきゆりゆり模範もはんと失あはるる事ことと
 こと心こころの事こともしきりしにちきいし俾べいゆる人ひとありて始はて一ひとと
 多おほく後のち方かたとありしものも老蘇らうその儒にゆうしく其その上かみより人ひと事ことと欲ほ
 掲かげの論ろんと肆ししきりし忌憚いしはんも事こと命めい一ひと天てん虛こと吐はきし辭ことば大だいに
 とわする智ちなるも及および邪説じやくせつ撓たう議ぎせり盛さかなる事ことを理りやうはるるに
 沙汰さたの元もと運うんもしきりしされ釋しやく愈いし佛ぶつ老盛らうせいよりわくしけり
 生なましく福ふく子しと瓜排かはいしきりし孟子まうし河かよりわくその孟まう
 簡かんより書しよとさるるも天地鬼神てんちくわんしん臨りん之の在上のじやう質しつ之の在の信しんとを

哲人の言を今翁も亦も孟子の功を及ぼさず及んば韓愈の
も其地をなす所なりとあれし其翁の初の空言を信じて

釋源空うちえ

ひりし源空の九條の月梅殿はらせし一校死請ごとく今も新
王をいふ所ありある其哲言書と翁をいふ所あり其翁の言
るは心も念佛しく極楽をいふ所あり其翁の言るは源空地
獄に墜たすといふ所あり其翁の言るは彼宗つよとを
さして信する事よ不ふといふ所あり其翁の言るは其翁の
本ありし言をいふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の
又墮つて地獄にありといふ所あり其翁の言るは其翁の言る
亦代りて死の制禁なるをいふ所あり其翁の言るは其翁の言る
まゝいふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の

其翁の老長あり其翁の行を死せしめし中々詩歌
せざるしといふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
て一洗し其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
心ありし言をいふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
而して相約し其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
まゝいふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
人いちらん其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
某をいふ所あり其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
わが言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
ちる言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
哲人の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る
ある言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言るは其翁の言る

是信少く折言ひはといふ老長を氣分くしてやむぬけ分命
孤妻か神罰なき事と云はく折言ひやう源空と云ふ
ちるよをみよ地獄を事と云はく折言ひはつめ今
箱折言をてよと異なり上を皇天といひてきつを后去
履く天地なけく折言折言ひは一説あり天地の罰を
少くしてさして我道の有る折言六條を同しんを言ひは
ちりやうた釈法の教有と云ふ一實と虚とするはあり
折言の言と有りせよは有と云ふ一虚と實とするは
實と虚とするは一虚は極東地獄のさしをて虚言事と
言ふと云ふと云ふより真候一如と云ふことと云ふは佛の教と立
て衆生と云ふけは賢愚とわらん思意り法らんすて念佛
滅罪の中をゆしてやむぬそ釈迦如来此密言なる釈教と云ふ

諸宗の社なる社の傍をいふと互よんと云ふと云ふ侍り候も
淨土地獄の沙汰と云はる事といはん今深空折言も相傳
の旨あり一九條敷れしる言洋と云ふは空階下地
獄も一これハ無と云ふ有と云ふ虚と云ふ實と云ふ
元生よ生死と云離るる法とするは釈迦の本意あり
そよハいさう修言をいふと云ふ一吾儒之誠と云ふ人と教
化する及といふ雲泥のさしはる一

異説あり

ある日翁病と云く人よ来りて翁も純純よと云はる
今日を志すといふは侍を法する死んて日と云ふ
法あり一程よ當代実況の事よ及たり座中一人翁もむ
ひく多し今西京東都におおく世をいひて人と率る儒者の

況と承りしや或は扶國の道とて神道と難くともあるに或は
陽明の學とて良知と云うてもあるに或は古の學とて新義
と造りてくともあるに紛々実同の況ありけりやと云
うは是非とせん翁の心はおおくいつ思ひ始るや翁
さうくあはれ門戸とて多くて実況と唱ふるものや今戸
さうく流とてさうく流れは是の況と云ふ人々も不見あるを
作人として一箱古の學とて多くいつてはさうく
らばさうく天とて一原なるものなりその一原のさうくと
悟りぬまはわすのたとして今國よりさうくは良知の況と
窮理とてさうく守郷魯の學とて濂洛とてさうくは流
是と知りて聖賢の書とあるに聖賢の書とてさうくは
志と難くともなうとてさうくは其のさうくとさうくは今の

儒者お月くは自高あるんありて濂洛の書とてさうく讀ん
たるにさうく程子の藩籬とて窺を原とて己の心とてさうく
大賢と議は不見の是れを姑くさうくさぬ其子の抑為濂
洛なるにさうくさうくとてさうくは其の今に孔孟の書とてさ
うく讀んては孔孟のさうくとてさうくは孔孟のさうくとてさ
うく程朱の況と教ふるに今に程朱の抑とてさうく議す
まは孔孟の議する事とてさうくは其の孔孟も教ふるにさ
あはれ程朱の孔孟を二子とて世に尊信するに其の議するに
うけらぬ事と程朱を世にちうく明朝よりて或は議するに
あはれ程朱の是と議するにさうくは其の程朱の是と議するに
さうくは其の是と議するにさうくは其の是と議するに
孔孟の是と議するにさうくは其の是と議するに

妄談して根もなき事のさうんをよびてあやうか敷き
あゆりて中印の二はあやうたき太うまはなぬよのよ
世と應く言及るるぬきやうれと心懸てよく其験
とる心と思ふて未録のまうしやう清君列子書と見
終りや悪云さるひり一人あはれ家持くふのあやう
いひてこき移らん日こ小子を以てて昔ほいふら
来報とるて實にふはちをまう智叟といひ一人
とらんくうく大あり山とあつちる人の力さるぬくこ
月らほいふてさうまきとらつちとあひなぬとてわ
代をさるちあてわ子れ代も往く山月ら孫の代も
又其子れ代も往く山月ら孫の代も往く山月ら孫の代も
てまうていふてあひなぬとてさうまきとらつちとあひなぬと

高言をいふ人のあやうくゆも悪きいふるなるのいせよ
悪きとていふ悪き名はま智叟といふるなる事いせよ
まうていふ智叟を名はせけりあしまうて下の中まう
ふはれぬあやうくもいふひまをたすていふるま智叟といふ
種まうた人のまうく智叟といふるなる事いせよ山と後まうの年
とあてまうそのあやうくまうまうその功と成就せぬ
まうていふまういせのいある悪きまうく智叟といふるなる事
まうていふ悪きまうていふ御宗冠といふと流していふるなる事
ひたしめ今箱も匣平論定まうのり成り後まうのりいせよ
まの明切まう人をみてま箱も匣平論定まうのり成り後まうのり
まうていふまういせのいある悪きまうく智叟といふるなる事
あはれぬひまをたすていふるなる事いせよ山と後まうの年
とあてまうそのあやうくまうまうその功と成就せぬ

天地を極むるありて時とせしむるは道に百物も是をを生んぬる車と
うをく車は威とありて果ては道に氣とありて此の形も
形象もなす方所もなす得たる多し道にまてふ一なるを孔子
形をなす上下とて器と形とを道といひ朱子を形をなす
先後とてく軌と針とを形とせずと曰一理あり今其を道と
ありては枝葉の上とて後論とせむは物も異同あり底極
ありては體用の説も亦之を近より用は道に必體あり寂然不動ハ
體より感而遂通ハ用なり物ありて存養すは體小用て用存
一動も有察すはハ用小用て體行たる是と體用源顯微
之間といふなり孔子の敬以直内義以方外といひ孔子思の中和
とて大平達道といひ孟子の仁義とて正位大道といひ
ありては一回一理なり體用といひはこゝろをさう體用小用は

のあり彼曲学の徒僅くして得小自足とす道は全體大用あり
と善はぬと小とるをさうぬく福する多し第三等小ハ放
蕩と貴ハ名檢といひは古も文辭曲籍と學と一多ハ禮樂居
敬窮理の反とてさうてハ腐儒乃常格と相とてハ朝野ハ礼學
者倫己の道といひくを辯明とてさうのともせんその議論とてさう
不急の察とて用の辨説とてさうて人身と嘔とせむるあり
とこれ等ていひおんま言の系とせん多し大息とせむるあり
やししう扁鵲齊桓の疾とせんてさうとては瓜とせんあ
りてさう多しふたつとせんや療治の多しなり後論茶匙とて
等をさう信学の弊とせんてさうとては桓公の疾の口とぬきさう
儒小扁鵲ありては療治の多しなり下論や老學非又は後論のありて
信とてはの將とてさうふたつとせん口と箱と敬島とせんは

此を以て今を世に垂れし虞愚となりぬるは高麗の徳
義と銷刻し淳辭惟託文字と造化すたは蘇秦洛陽
宿執の害なきことす遊説するを從横捍圍傾危のたむる
ことこれ今天下の学者皆弱る死に剽掠多し二病除く
され高談性余博究群書して聖賢の徒とすん
横渠先生もそとそと学者の要務を志すは矯詔警惰
の二病を承てみんし慎弱も義を志し志れく
ほゆる郷愿の人を剽掠せし忠厚の人をくもを誤信
の徒は漸く下し瓜をていハ矯詔警惰の一語学者の要務
をあらすきりすたき士ある者の頂上の洪針多し
忠厚のありし
これこそ忠厚の心をなすしその人なりを推しん

杖負ありしとてさふたはをさしつこ箱目より樂毅
侍りしとておとらう教義玉の士あらん字同りて道の
あつましとささくの人ありさるる後世教將若あるを
字同あらんハ樂毅燕の昭王は上將とて齊を伐て
七十餘城を下せハ非常の大功あり不幸して師を凱
旋せり先昭王薨一惠王齊の及間と信し將とて
兵権と奪ひし教を成の大功とすすみやう
燕とさる見幾而作不侯終日しちハ其後力を請ふ
事一時趙王燕と依むすと教を諱るる固辭して来は
詔を成滅し忠臣の法とをたしその惠を報する書とさる
忠厚れん言介と藹然多し我困及後の世空谷の足者の中
ゆらたしその書中よ君子六父絶不出西聲忠臣去國不潔其

名をいひて其の遺言をうけて、孝問はくして、八流をて言
の辭を本とて、今其意を解侍りて、文絶不出惡
聲といふ多と、は人々文通して、其人の惡事といふぬと、よ
ての本を其一人の中、多ふて、まじりて、いんて、今其非と
いふ事、に文絶く、後は其人のあり、事と、一向言ふ事、ぬ君子
の忠厚人、願うる、乃ん、翁其言を、いひて、

ち、こゝろ、な、思ふ、の、よう、その、ゆゑ、と、て、方、高、の、を、あ、い、あ
て、こゝろ、文、前、つ、ま、う、も、お、あ、ら、ま、し、て、伊、川、先、生、の、感、服、す、る
事、あ、り、と、蘇、東、坡、伊、川、と、い、ふ、の、思、ひ、を、折、る、事、を、卷、成、の、程
願、う、事、と、稱、し、又、衆、中、や、く、朝、て、塵、糟、隙、裏、の、叔、孫、通、を、と
と、い、ひ、て、伊、川、遂、に、東、坡、を、北、と、一、言、の、お、ひ、り、と、い、ふ、に
そ、う、く、お、た、い、浴、蜀、の、二、黨、い、つ、ま、う、い、つ、ま、う、邪、も、

い、ふ、と、て、ゆ、き、う、又、利、怒、初、め、伊、川、は、ほ、ひ、く、ま、ひ、ら、後、亦、小、人
よ、業、一、伊、川、と、誤、し、て、陪、傍、の、請、せ、て、以、人、聞、て、伊、川、よ、告
し、て、伊、川、の、信、ひ、た、れ、故、今、の、情、厚、一、つ、ま、あ、り、も、能、の、
心、一、と、い、う、不、平、の、辭、也、と、い、ふ、一、も、あ、り、の、條、吾、後、の、師、法、と
ま、一、忠、長、去、國、不、潔、其、名、と、い、ふ、忠、厚、乃、事、行、を、公、人、に
多、り、との、君、と、義、絶、く、其、國、と、い、ふ、人、又、あ、ら、な、く、君、の、北、と、い、ふ
と、あ、れ、ゆ、て、こ、う、や、ま、し、ぬ、と、い、ふ、一、分、の、上、と、潔、く、せ、ん、す、れ、
君、の、あ、り、ま、た、た、れ、ゆ、に、わ、ら、な、く、し、自、ら、う、ち、り、ま、し、て、
お、も、し、む、を、乞、志、臣、の、人、多、う、翁、が、歎、ま、あ、り、時、を、その、老、命、を、
其、父、を、陽、寺、左、平、次、と、い、ひ、者、長、秋、の、歎、也、池、田、勝、の、子、光、致、
其、事、を、其、後、天下、泰、平、と、い、ふ、一、大、坂、死、城、の、事、と、い、ふ、一、御、に、は、少、く、
諸、侯、の、國、は、ほ、く、さ、り、ゆ、り、ゆ、り、と、い、ふ、一、行、成、功、あ、り、一、士、も、こ、う、

いよのゆきしきしき形あれ共あるに新しきくはく信向者
ゆる不思及く人なりしあもいふくしきて惑くはたて夫
其ををあるなりしゆりてまの神しよの佛く漫小
雲騎ありし神しゆりて虚誕なる本と遠絶して世と証
民を欺くはふ人籍取れく市と市一錢財積て山とあり其くハ
國家の大賊を平ん天下の大業をなす

飛驒山の天狗

吾々くあましく翁鬼神の感應を氣の味はるる氣と流
其の智を又あはれりしとゆりて鬼神をよきく言ふの
はくゆりしに寂然不動して亮事し氣をまへ鬼神
いふ公を有りあけり乙のり平方のあるやくは公羽とてはて
我よりあくる謝靈運詩達人貴自叙といひ一暗

中あましく其の事あはれりし中く靈運といふ事ありしはてハ
巧く天也不違況於人乎況於鬼神とゆりしをいふ及ん
王也鬼神も我もあましく事といふはてはての事いふ我とし
て天下のよき事とて天下惟我の有り多し我志不違事あ
れむといふ後世の賢人の我として万人の介不違くは万
人の中といふも多し我あり事といふ事といふは我といふ
あましく事といふも一念未生の時中絶未だ其體をあり吾子の我
存養をてて事いふは天也我より位一萬物我を育
鬼神も我を感應はなる我もぬるあり今郡康節の
一念起る事なるも鬼神も事なり我も事なり我も事なり
よきんといふ事いふ事といふ事いふ事いふ事いふ事
一ありし時人の信あり一山國より一兒工の北洋山に在りて

儒の後のの年をすらすらとてはけりて多うて多
よむはしむて始てこころいふやその延きるもいふるもふもけりて
多うと勉強をこし口とちりゆふ難らりていふ元方の歌詞の
おりのまのこもあつて聖書のぬきまをたてにたりて常小
お吟して我人の有とすふ助なまふおくれ

神ひらくの歌

座中ひをわ歌とぬめりあつていふ今と元方の歌をて言別
多う半よまも人心を無乃幾すしてさけりていふと思ひひる
ふらけはくは物後やと始て心をもていふ心弱古今集いふ乃
集をちかひ共歌いふも誠實ななふあつていふ元方よりて
いふくくしそら右のえ方れ歌をきりていふ貫之の目よりよと
多う社ひらくの歌とあせりて月令より孟春のころあふ東風

解凍とありよかなひくふあつていふ今と元方の歌をて言別
陽和のそり最初のころやと始て心をもていふ心弱古今集いふ乃
色ねくの貫之の目よりよと春風の凍とこころいふを
少くともいふよかあつていふ今と元方の歌をて言別
此春遊と以後も其秋をて今と半と神ひらくと結ぶ所の
少うまるとい一首の中よとあつていふ今と元方の歌をて言別
此春遊と今又春ふるといふとあつていふ今と元方の歌をて言別
いふ歌も多けあつていふ今と元方の歌をて言別
集をていふ今と元方の歌をて言別
お吟すまはるの味あつていふ今と元方の歌をて言別
いふ歌も多けいふ今と元方の歌をて言別
漢魏の詩を實情をていふ今と元方の歌をて言別
功拙といふ今と元方の歌をて言別

訓と聞くと嘲笑と頭痛すもいふもつらう悪心すもいふもあつと
今の世はうらみの箱今いふはとびとびを嘔吐もせぬ
と世は篤学の人もあはれ老老の鼓舞言ふあはれら
本とせぬん

駭且雜話卷一 畢

